第44回

青森県少年の主張大会報告書

青い雲

主催：青少年育成青森県民会議　国立青少年教育振興機構

目　　次

■ 第 44 回「青森県少年の主張大会」概要 …… P 2

■ 主催者あいさつ …… P 3

■ 来 賓 祝 辞 …… P 4

■ 発　　表 …… P 5～P12

■ 講　　評 …… P13

■ 第 44 回「青森県少年の主張大会」実施要綱 …… P14

■ 講　　演 …… P15～P16

■ 紹　　介

第 44 回少年の主張全国大会～わたしの主張 2022 ～…… P17～P21

・内閣総理大臣賞作品

・文部科学大臣賞作品

・国立青少年教育振興機構理事長賞作品

・審査委員会委員長賞作品

・審査委員会委員長賞作品

第 44 回少年の主張全国大会開催要綱…… P22

第44回「青森県少年の主張大会」概要

■次　第

1　開　会

主催者挨拶	青少年育成青森県民会議会長	橋本　　都
来賓祝辞	五戸町長	若宮　佳一

2　発　表

同じ人間として	今別町立今別中学校	３年	横岡　茉子
Hey, Siri　AIと共存する社会とは？	大間町立大間中学校	２年	佐藤　香月
こころの交流	五戸町立倉石中学校	３年	髙村　桃花
兄の存在	五戸町立五戸中学校	３年	小野　葵衣
私なりのウィズ・コロナ	弘前市立東中学校	３年	工藤　百華
その１票どうする？	階上町立道仏中学校	１年	長根　明凛
温かさで救う心	青森県立三本木高等学校附属中学校	３年	久保　帆乃
僕の宝物	風間浦村立風間浦中学校	１年	工藤　彪馬

3　講　演

「ラビアンローズ～バラ色の人生を～」

講師　十和田バラ焼きゼミナール　舌校長　畑中　宏之　氏

4　表　彰

最優秀賞１名、優秀賞２名、優良賞５名

5　講　評

青少年育成青森県民会議　青少年専門指導員　坂本　　徹

6　閉　会

■審査員

青森県中学校長会	副会長	三浦　一純
青森県ＰＴＡ連合会	会長	山子　泰典
青森県環境生活部青少年・男女共同参画課	課長	松村　浩二
青森県教育庁学校教育課	総括主幹	中村　　永
青少年育成青森県民会議	青少年専門指導員	坂本　　徹

主催者あいさつ

青少年育成青森県民会議
会長　　橋本　　都

皆さん、こんにちは。
第44回青森県少年の主張大会の開催に当たり、一言御挨拶申し上げます。

本日は、五戸町長　若宮　佳一様はじめ、御来賓の皆様には、お忙しい中、本大会に御臨席を賜り、誠にありがとうございます。
この大会は、昭和54年の「国際児童年」を記念して始められ、これまで数多くの中学生や大人が参加し、中学生の皆さんからたくさんのことを学んできた大会であり、県内各地の持ち回りで開催しています。
少子高齢化、国際化、情報化が急速に進み、環境が目まぐるしく変化する現代社会において、次代を担う子どもたちには、心身ともに健康で、他者を思いやる心を持ち、社会的に自立していける、健やかな成長が求められています。
そのためには、広い視野と柔軟な発想や創造性などと共に、物事を論理的に考える力や、自らの主張を正しく伝え、理解してもらう力などを身に付けることが大切です。
少年の主張大会は、これらの契機となることを願い、実施しています。
本日は、原稿審査で選ばれた８人の中学生の皆さんが、様々なテーマで発表を行います。皆さんがどんなことを考え、どんな意見を聴かせてくれるのだろうと大変楽しみにしています。
大会に参加してくださっている五戸町立五戸中学校の生徒の皆さんも、発表を聴きながら、「自分ならどう考えるだろう」「自分ならどういう行動が取れるだろう」と自分自身の内面に問いかけながら、様々なことを考える機会にしていただきたいと思います。

また、発表の後には、「食によるまちおこし」に取組みながら、全国を飛び回り、十和田市のＰＲ活動に御尽力されている十和田バラ焼きゼミナールの畑中　宏之様に、「ラビアンローズ～バラ色の人生を～」と題して、御講演をいただきます。畑中様には、御多用の中、お時間をつくっていただきました。心から感謝を申し上げます。

中学生の皆さんは、小学生の時とは違い、学習内容や活動範囲が広がり、広く地域のことについて学び、スポーツや課外活動に打ち込んでいることと思います。また、ここ数年、新型コロナウイルス感染症によって、学校生活に制限が加えられる中、命や社会のこと、家族や友達のことについて様々考えた人が多いことでしょう。中学生としての３年間は、多様な人々との関わり、つながりの中で自分を形づくり、心身ともに大きく成長する、人生の中でもかけがえのない時期です。この大会が、皆さんの成長のきっかけになることを期待しています。

結びに、新型コロナウイルス感染症の終息が見えない中、協力校として、感染症対策をはじめ、様々な準備をしてくださった五戸町立五戸中学校の浅石校長先生、そして教職員の皆様に感謝を申し上げ、挨拶といたします。

来賓祝辞

五戸町長　　若宮　佳一

第44回「青森県少年の主張大会」が、このように盛大に開催されますことを心からお喜び申し上げますとともに、長年にわたり本大会に開催に御尽力されている青少年育成青森県民会議の皆様に対し深く感謝と敬意を表します。

本大会は、中学生が日常生活で感じていることや考えていることを発表することにより、次代を担う青少年としての自覚と自主性を育てることを目的に開催されているものと伺っています。本日出場の弁士の皆さんは準備に多くの時間を割いてきたことでしょう。どうぞ、言葉を通じて人の心を動かすことができるよう堂々と発表してください。期待しています。また、聴衆である五戸中学校の皆さんは、自分の考えと照らし合わせて聞き、考えを深めたり心を広げたりできれば素晴らしいことだと思っています。

さて、今年の夏の全国高校野球選手権大会は、かつて甲子園を目指した一人として格別なものがありました。100年の長きにわたり閉ざされていた扉が開き、13回目の挑戦で、ついに優勝旗が東北勢の手に渡ったのです。優勝した仙台育英高校のメンバーには、いわゆるスーパースターはおらず、一人一人が自分の役割を確実に果たすことで栄冠を手にしました。その戦いぶりに、今は亡くなられましたが、作詞家で詩人である阿久悠さんの「甲子園の詩」の一節を思い出しました。その一部を紹介しますので、自分自身の考えと照らし合わせて聞いてみてください。

天才もいいけれど
普通の人もいい
楽々と困難をクリアする人は
ほれぼれとして見えるが
財産は練習量ですと
黒い顔を光らせる人も凄いと思う
一人で一点を取るチームもあれば
三人で一点を手にするチームもある
どちらがかっこいいかは
考えようで
点より線の方が長いし
さらに面の方が広いのだから
三人で一点も結構カッコいい
僕は天才も好きだけど
普通の人も大好きで
その普通の侮れない力が
天才を倒すことも知っているから
普通のことを普通に繰り返し
普通に積み重ねる人を
尊敬する
甲子園は天才も待っているが
甲子園は努力で磨いた普通を
いちばん待っている
自分の汗の量を知る人
自分の涙の重さを知る人
自分の夢の大きさを知る人
自分の心の強さを知る人
そんな人を待っている

結びに、本日の大会がここにいるすべての中学生にとって心の成長につながる有意義なものとなることを期待し、お祝いの言葉といたします。

【最優秀賞】

私なりのウィズ・コロナ

弘前市立東中学校　３年　工藤　百華

新型コロナウイルス感染拡大から三年近くたった。新型コロナウイルスに影響を受けたものは数えられないほどある。その中でも私は、部活動で新型コロナウイルスの影響を多大に受けた。

剣道部に入部したころ、まだ青森県はあまり影響がなかった。だが、秋頃から弘前市でも感染者が増えだした。それと同時に部活にも影響が出てきた。防具をかぶると暑い。加えてマスクをしながらの練習のため、息苦しい。そしてさらに、プラスチック製の「マウスガード」を布マスクの上にすることになった。剣道を始めたばかりで慣れないうえに息苦しかった。やがて、青森県にも感染者が増加し、いくつかの大会が中止になっていった。その頃だった。剣道のルールも新型コロナ感染拡大により、少しずつ変化していったのは。例えば「つばぜり合い」。互いに竹刀とこぶしを押しつけ合い、タイミングがきたところでくずし、引き技などにつなげるための技だ。これを長時間行ったり、発声したりすると指導、その後に反則が入るというルールが追加された。仕方ない事だとは思った。だが、当時つばぜり合いからの引き技を得意にしていた私にとっては正直悔しかった。何で新型コロナウイルスに邪魔されなければいけないのだろう。私の必殺技なのに。それでも剣道は楽しかったし、一本決めた時の爽快感や自分が少しずつ強くなっていく達成感が感じられ好きだった。

新型コロナウイルスの感染拡大は広まり続け、コロナによる剣道の新たなルールはそのままだ。そんな中、私は最後の大会を迎えた。うれしいことに、地区大会でベスト８入りし、県大会へと進むことができた。緊張の中、気合いを入れて試合場に立った。前に出て決めよう。次こそ！と思った瞬間、「止め！反則一回。」審判が叫んだ。頭が真っ白になった。反則の理由はつばぜり合いの後、相手は下がったのに私は下がらなかったからだった。これも新型コロナ感染拡大によって定められたルールだった。「反則は二回とったら一本技ありになる。落ちつけ。落ちつかないと！」しかし、その時の私は爆弾を抱えているようなものだった。「始め。」試合が再開された。「やばい。動かないと。」その時、右小手に「トン。」と重いものが当たった。「小手あり。」一本とられた。誰もが納得の一本だった。とり返さなければと必死だった。でも、タイムオーバーだった。ポッカリと胸に穴が空いたような気持ちだった。ただただ虚しさだけが残った。反則しなかったら…。新型コロナが広まらなかったら…。自分の未熟さのせいだとはわかっている。だけど、新型コロナ感染拡大のルールがなかったらもう少し戦えていたかもしれない。モヤモヤしたものがしばらく私の心に残った。

新型コロナウイルス感染拡大の影響を受けたものは数えきれないほどあるだろう。剣道もその一つだった。しかし、それをどんなに嘆いてもどうにもならない。新たなルールのため今回の試合では反則をとってしまった。だけど、それがあってこそ、さらに剣道への思いは強くなった。これからは新たなルールにのっとり、自分の納得のいく一本を決める。その思いで、新型コロナウイルスと共存して励んでいきたい。

【優秀賞】

Hey, siri AI と共存する社会とは？

大間町立大間中学校　２年　佐藤　香月

「Hey, siri　面白い動画　教えて。」

みなさんは、音声認識機能を使ったことがありますか。呼びかけるだけで、情報がすぐ手に入るとても便利な機能です。ローマ字が打てなかった小学四年生の頃から使い始め、現在は見たい動画をいち早く検索するためによく使用しています。この音声認識機能は AI ＝人工知能と呼ばれるものです。

最近はお掃除ロボットのルンバ、AI スピーカー、自動運転の自動車など、AI は徐々に私たちの生活の一部になりつつあります。三年前、お寿司やさんに行った時、私たち家族の対応をしてくれたのは、AI 機能搭載ロボットのペッパーくんでした。以前、見たことはありましたが、言葉が流暢になっており、

「喋ってる！動いてる！」

と改めて感動しました。それと同時に、

「ちゃんとロボットが仕事ができるのかな？」

と心配にもなりました。

しかし、多少スピードはゆっくりなものの、ペッパーくんの対応は正確で、とても丁寧だったのです。その時、AI はこれからいろいろな面で私たち人間を助けてくれる心強い存在になっていくのだと確信しました。

しかし、その後、私は衝撃的なニュースを目にしました。なんと、2045 年には、AI が私たち人間の知能を超え、さらに、現在ある職業の半分が AI に奪われてしまう可能性があるというのです。

私の将来の夢は、理学療法士になることです。理学療法士とは、身体に障害や不自由を抱えた人や、身体機能が低下した高齢者などに対してリハビリテーションを行い、回復のサポートをする仕事です。この職業の魅力は、患者さんの心に寄り添い、コミュニケーションをとりながら、体も心も理解してケアしていくところです。

しかし、この心をつなげる仕事までも、この先、技術が発達していけば、AI に奪われてしまう可能性があると知り、驚きを隠せませんでした。そこで私は、AI と人間を比べて、それぞれの強みは何かを考えてみました。

AI が得意とする面は、分析や診断が適切にデータ化できるということです。大量のデータをもとに、短い時間で正確に処理を行うことができるので、適切なプランを立てることができ、今後のリハビリテーションにおいて欠かせない存在になることがわかりました。

一方、人間は AI のように情報を最短でデータ化することは難しいと考えられます。しかし、心のつながりを重視できるので、人とのふれあいを通して、その人に合った対応や支援をすることができます。

AI の「的確なデータ」、人間の「心」、どちらも人を支える上で大切なことだと私は思います。それぞれの強みを生かしながら、医療に携わることで、よりよいサポートができると感じました。この先、人間の知能を AI が超える時代が訪れるかもしれません。しかし、AI に全てを頼りきるのではなく、また、AI を敵対視するのではなく、それぞれの良さを理解し、認め合い、補いながら生活することがこれから私たちに求められていることではないでしょうか。

私は、感情表現が苦手なところもありますが、これからは相手の表情や反応を見て、気持ちを感じとりながら、言葉や思いを伝えていきたいと思います。そして、人間の強み「心」を大切にしながら、AI と共存する社会を目指していきたいと思います。

【優秀賞】

兄の存在

五戸町立五戸中学校　３年　小野　葵衣

あれは、中学校に入って間もない、体育祭に向けた練習をしているときのことです。私と兄は、同じ白軍。行進練習のとき、うまく行進できていなかった兄に、兄の同級生が一生懸命教えてくれているのを見て、優しい先輩だな、とうれしく思っていました。しかし、それでもうまくできない兄は途中でやめてしまいました。その時です。

「ちゃんとやれよ」「何でできないの」

強い口調の声が聞こえてきました。思わず振り返ると、別の先輩が、「もういいよ」と兄に教えてくれていた人に言って、練習をやめさせてしまいました。（なぜ兄に教えることをやめさせたのか。）そう思うと悔しくて仕方ありませんでした。

兄には、発達障害があります。私が小学校に入ったときに、兄がみんなと同じ教室で授業を受けていないことを知りました。そのときは発達障害についてあまり知らなかったので、私は違う教室で授業を受けていることが普通のことだと思っていました。私が三年生になった頃、「ことばの教室」に行く子がいました。このことをきっかけに、兄には、他の子とは異なる部分があることを知ったのです。

小学生の頃は、このようなことが気になることはありませんでした。しかし、中学校に入って間もなく、体育祭練習での出来事の後、私は発達障害について深く考え始めました。

みなさんは発達障害に対して、どのようなイメージをもっていますか。「発達障害」と聞くと、「普通ではない人」と思う人もいるかもしれません。もし発達障害である兄が身近にいなかったら、（私も発達障害者を見下したり、見捨てたりしていたのではないか）、と思います。ですが、障害があるとしても、一人の人間であることに変わりはありません。兄も、行進ができるよう一生懸命頑張っていました。しかし、「周りと同じ行動ができない」ということも発達障害の一部です。また、兄は「人の話を聞く」ということが苦手です。そのため、周りがこそこそ話していても自分のことだと気づいていませんでした。

そんな兄には、優しい一面があります。それは、頼んだことをきちんとやってくれるところです。毎回「いやだよ」と言いながらもやってくれる、優しい兄です。

人には、個性があります。私は、障害がある人はそれ自体が個性の一部ではないかと思っています。人によっては不快に思う人もいるかもしれませんが、恥ずべきことではないと思います。周りの人と自分の普通は異なります。障害者の「普通」も別の人の「普通」とは異なります。それなら自分たちの「普通」を押しつけることなく、相手の「普通」を知ることが大切だと思います。

兄の存在は私に、大切なことを教えてくれました。人間は、誰かがそばにいるだけで安心し、個性的でいることができます。障害のある人も同じです。誰かが寄り添ってくれるだけで、嬉しいのです。

兄はその後、人と関わるようになってからよく話すようになり、いろいろなことに興味をもって挑戦するようになりました。自分の意思を表すことができるようになりました。

世の中には、障害のある人と関わるのは面倒だと思う人がいるかもしれません。実際、発達障害のある人の気持ちは読み取りづらく、理解できないことが多いと思います。しかし、わからなくて当然なんです。わからなくてもいいんです。大切なのは、その人がどんな人であるのかを知ることなんです。寄り添っているだけで、わかるんです。その人の良い部分や、他のいろいろな部分が次々と見えてくるんです。その人の「できないこと」だけではなく、「できること」「得意なこと」にも目を向けてみませんか。

私は一人でも多くの人に「発達障害」に対しての悪いイメージをなくしてほしい。一人の人間として見てくれる人が増えてほしい。そのために私は、障害の有無や程度にかかわらず、誰もが取り残されない、過ごしやすい社会をつくっていきたい。人の良いところに目を向け、寄り添い、どんな人なのかを知ろうとすることを続けていきたいと考えています。この目標が目標で終わることなく実現できるよう、自分から行動し続けたいと思います。

【優良賞】

同じ人間として

今別町立今別中学校　３年　横岡　茉子

私の担任の先生は、以前、特別支援学校に勤めていました。私は、これまで知らなかった「特別支援学校」の話を先生から聴き、もっと知りたくなって自分でも調べてみました。すると、そこには驚くようなことが書かれていました。それは、

「自分は宇宙人と同じだから、誰も自分のことを理解してくれないし、しようともしてくれない。

みんなが自分のことを嫌っている。」

と感じている生徒もいる、という内容でした。

確かに、ふだん生活していて、障害のある人、ない人に関係なく、

「あいつは変だ。」

と決めつける人が少なからずいます。一方で、障害のある人も、障害のない人に対して、

「自分のことは、どうせ理解してもらえないし、みんな、自分を嫌っている。」

と思ってしまうと、お互いに偏見をもつことになってしまいます。そうすると、何をやってもうまくいかなくなってしまいます。

この話を読んだとき、私の通っていたスイミングスクールのことを思い出しました。

そこには、いろいろな個性の人が集まります。泳ぎが速い人、こつこつ努力する人、初めての人とでもすぐに打ち解けられる人、鬼ごっこが大好きでいつも走り回っている人、一人が好きな人……。たくさんいます。そして、その場は、それぞれが自分らしくしていて、私はその空間が大好きです。コーチも優しくて、その人に合わせて対応を変えたり、友達のように悩みを聞いてくれたりします。みんながいつも笑っていて、とても素敵な場です。

ここで私は、自分と合わないからといってその人を否定するのではなく、すごいところはきちんと認めるという姿勢を学びました。みなさんは、少し空気を読めなかったり、感情を表に出すのが苦手だったりする人に、「変わっている」「ちょっと変」「いっしょにいてつまんない」「何考えてんの」と思い「いっしょにいてつまらない人」とレッテルを貼っていませんか。障害のある人のことを自分たちとはちがうと決めつけていませんか。しかし、私たちは誰もが個性ある同じ人間です。できることがあれば、できないこともあります。

今、世の中には、様々な差別があります。男女差別、感染者への差別、外国人への差別……。障害者差別も、大きな人権問題の一つです。私は、この世の中に「普通」の人はいないと思います。例えば、学力がどれくらいだったら、本を何冊何ページ読めば普通なのかなど、具体的な基準は何もありません。人はみんなそれぞれ、できること、できないことのちがう凸凹した存在です。だからこそ他人を認め、目標にして頑張ったり、人を尊重したりできるのではないでしょうか。

もし、自分とちがう部分を感じたら、「あの人はどんな特技を持っているのだろう」と考えてみませんか。そうして相手の存在を認めることで、相手からも信頼を得ることができ、おたがいに偏見を持ってしまう状況を変えることができるのではないでしょうか。

私は、これからたくさんの人に出会って、たくさんの人と話して、いろいろな考え方を知ったり、みんなを尊敬できる人になりたいです。障害のある人も、ない人も皆が「同じ人間」として尊重し合える世の中を作るために。

【優良賞】

こころの交流

五戸町立倉石中学校　３年　髙村　桃花

飛行機の窓から見下ろすと、一面の緑。どこまでも続く草原の国が、私を迎えてくれました。

七月の始め、私は家族と共に、モンゴルを訪れました。大統領ウフナーギーン・フレルスフさんのご招待による、五泊六日の旅です。

我が家は、以前、祖父がJICA国際協力機構の役員だったこともあり、東京の大学生や海外の青年のホームステイを受け入れていました。祖父がまだ二十代だった約四十年前から始まり、ドイツ、韓国、スリランカなど、多くの国の若者が訪れました。その中に、通常より長く、一週間ほど滞在した、モンゴルの青年がいました。二十八年前のことです。「ふるれさん」とあだ名をつけられ、家族ととても仲良くなり、帰国のとき、いつかモンゴルに招待するよと言い残していった人が、本当に約束を果たしてくれたのでした。

新型コロナがようやく落ち着いたモンゴル国内、伝統のナーダム祭に合わせての招待に、祖父母も曾祖父も「まさかあの青年が」と大喜びでした。

私はといえば、実はそれほど乗り気ではなかったのです。話には聞いていても、自分は会ったこともない相手だから緊張します。学校も、何日も休まなくてはなりません。飛行機に乗れるのは楽しみでしたが、不安のほうが大きく、また、モンゴルから撮影チームが来るなど、どんどん大ごとになってきたのもなんだか嫌でした。

ですがそんなモヤモヤも、大統領やそのご家族にお会いするまででした。二十八年の歳月を越えて、お互い無事で再会できたとみんなが涙している様子を見たからです。来てよかった、と思いました。

数日間の滞在で、私のモンゴルに対する印象はすっかり変わりました。草原ばかりだと思っていましたが、首都ウランバートルは想像以上の大都会で、日本のアニメも人気がありました。見学した博物館で見た昔の道具類に、日本との共通点を見つけることもできました。

もちろん、遊牧民の文化も貴重な体験でした。動きやすくあたたかい民族衣装、羊肉料理。移動式住居ゲルの内部は、大きく快適で、テントとは思えないほどです。そして、特別席で観覧したナーダムは、式典のパフォーマンスや各種競技がとても迫力があり、まるでオリンピックを見ているようです。心臓のドキドキがおさまらない私は、「これは一生の思い出になる」と確信しました。

こんなすてきな旅ができたのも、昔、我が家にふるれさんが滞在していたご縁からでした。

祖父は、どうして何度もホームステイを受け入れていたのでしょうか。当時、家族はだれも英語を話せず、通訳もつきません。身振り手振りで意思を伝え合うしかなく、大変だったのではと思いました。ですが祖父は、「困ることは何もない。むしろ楽しかった。言葉は通じなくても、世界の人々と交流できた。人のつながりは言葉じゃない。」と語りました。

私にとっても、今回の旅の一番の収穫は、人々との交流だったと思います。大統領や側近の方が、家族ぐるみで歓迎してくれたので、年の近い子たちとも仲良くなりました。外国に友達ができるなんて、以前の私だったら想像もしなかったことです。たとえ言葉はわからなくても交流できる、という前向きな気持ち、そして今回できたつながりを大切にし、これからの交流を続けたいと思います。一生の思い出となった旅を、思い出だけで終わらせないために。

【優良賞】

その一票どうする？

階上町立道仏中学校　１年　長根　明凛

「何年生になった？」

「中学一年だよ。」

今年九十八歳になった曾祖母と一緒にいると、この会話を二分に一回繰り返します。認知症と分かっているけれど、だんだん雑になる私の返事。会話は短くなるし、そっけない態度をとったことはすぐに忘れられてしまいます。家族のことも、楽しかった思い出も忘れてしまっているのだろうか。ふと一人になったとき、曾祖母に対する自分の態度を振り返って後悔します。「心に余裕がなかった」と。

ある日、母が白い紙をごみ箱に捨てました。何気なく見てみると、それは曾祖母宛ての「投票所入場券」と書かれた紙でした。曾祖母は、何年か前から選挙に行くことが難しくなったため、投票所入場券を捨てているのだそうです。腰が曲がり、コンクリートの上を歩くのが苦手で外に出たがらない曾祖母は、認知症で誰に投票するのか記憶するのも難しい状態です。大切な権利を持っているのに、曾祖母は一票を反映させることができないのです。

そこで、曾祖母のためにできることはないか、投票方法について調べてみました。すると、障がい者手帳等を交付されている人で身体に重度の障がいがある人や、意思疎通が困難で日常生活でほぼ全てに介助が必要な要介護の人は、郵便等による不在者投票ができることが分かりました。

しかし、認知症でも自分で歩いたり動いたり会話ができる曾祖母は、郵便での不在者投票をするための条件を満たしていません。投票所に行って、投票管理者に代筆してもらう「代理投票」という制度もありますが、すぐに忘れてしまう曾祖母は、自分の意志を伝えることができないため、この制度を利用できません。

また、調べていくうちに知的障がいのある弟のことも心配になりました。弟が十八歳になり選挙権を得たとしても、投票所という慣れない場所でパニックを起こし、投票できないかもしれません。また、不在者投票や代理投票を利用できる条件を満たしていないため、弟の一票を生かせない可能性があることも分かりました。

曾祖母も弟も、権利をもつ一人の国民です。介護保険を利用しながら自宅で過ごす高齢者として、障がい者福祉サービスを利用する青年として、全員が暮らしやすい国を目指すきっかけにつながる一票を入れることは、自分の生活がより良いものになることへとつながります。さらに、高齢者や障がいのある人と共に暮らす家族の希望を伝える一つの手段にもなると思います。

今、私の住む町も高齢化が進んでいます。私の住む町だけではなく、日本は高齢化社会が進んでいます。様々な悩みを抱える障がいを持つ人々も同じ社会に生きています。だからこそ選挙制度や投票方法も現代社会に合わせて見直しをすることが、共生社会へつながると思います。

「明凛、何年生になったの？」

「何年生になったと思う？」

私に良く話しかけてくれる曾祖母が、私との短い会話を楽しんで欲しいし、私も「楽しさ」を共有したい。クイズ形式にしたり、笑わせるような答えを考えて、曾祖母との時間を大切にしていきたいです。

【優良賞】

温かさで救う心

青森県立三本木高等学校附属中学校　３年　久保　帆乃

みなさんは、起立性調節障害という病気を知っていますか。

起立性調節障害とは、自律神経が悪くなり、起立時に身体や脳への血流が低下する病気のことです。例えば、朝になかなか起きることができない、朝の食欲不振、全身倦怠感、頭痛、立っていると気分が悪くなる、立ちくらみなどの症状が挙げられます。

この病気は、軽症例を含めると全国の中学生の約10％と言われており、約70万人もいると推定されています。重症になると失神することもあるため、登校困難になり遅刻･欠席を繰り返します。実際に、不登校の３、４割がこの病気という調査結果も出ています。軽症でも重症でも苦しい生活を送らなくてはいけないということには変わりはありません。この病気で苦しむ人が数人であっても、増えることがあってよいのでしょうか。

私自身も昨年の秋頃、この病気になりました。薬を毎日飲むようになったため、以前よりはよくなりましたが、今も時々立ちくらみや頭痛が起きます。ひどいときには意識を失うこともありました。本当につらいです。苦しいです。学校に行きたくても行けない、そんな日々が続くときもありました。

さて、みなさんはこれまでの内容を聞いてどのように感じましたか。大変だな、苦しいだろうな、などと思ってくれた人がいるならば、本当に、本当に感謝したいです。この病気は、あまり理解されておらず、「さぼっている」や「怠けている」と受け取られてきました。いまだに、治療方法や原因など医学的にも分からないことが多い病気なので､仕方ありません｡でも､もし身近に病気の人がいたら優しく、温かい心でサポートしてあげてください。病気の人は心も苦しんでいます。あなたがかけた言葉によってその人の心を救うこともあれば、傷つけて深い暗闇に落としてしまうこともあるかもしれません。起立性調節障害とは、それほど心を支配し苦しめます。いつ、どんなときでもまるで落ちたら、戻ることのできない崖の上にいるかのように。

私は二つの立場の方に伝えたいことがあります。まず、起立性調節障害で苦しんでいる方々へ、絶対に一人で抱え込まないでください。誰かを頼ってください。家族や友達、誰でもいいです。きっとあなたのことを理解し、サポートしてくれます。心のささえになってくれます。また、本や音楽が支えになることもあります。私は、周りに恵まれて、苦しいときに支えてくれた人がたくさんいました。本当に幸せでした。この幸せは経験した自分にしか分からない大切なこと。そう思ってモチベーションを上げてきました。だから､何度でも言います。一人にならないで勇気を出して誰かを頼ってください。次に、支えるべき側の方々へ、起立性調節障害とは思っている以上に苦しいものです。もし、興味があればインターネットを活用して調べてみてください。全てを理解してほしいとは言いませんが、少なからずこういう立場で苦しんでいる人がいるのだと認識し、ぜひ発信してほしいと思います。少しでも理解してくれる人が増えるように。

私はまだこの病気が完治したとは言い切れません。もしかしたら成人になってもこの病気と闘うかもしれません。正直に言うと怖いです。でも､そんなときには支えてくれる人が必ずいると信じています。なぜなら、この一年で私は、改めて周囲の方々の支えがどれほど心強く、大切かを知ることができたからです。

起立性調節障害は認知度が低いのが現状です。いつかたくさんの人たちの支えによって、少しでも起立性調節障害で苦しむ人が減るよう、心から願っています。

【優良賞】

僕の宝物

風間浦村立風間浦中学校　１年　工藤　彪馬

いつものように楽しく最高の夏休みを過ごしていた去年の夏休み。災害はやってきた。八月九日から、今までには見たことがないような大雨が二日間降り続いた。それも長い間。僕はいつ降りやむのかと、とても心配していた。二日目になると、大雨の影響で、川は氾濫し、家の中は停電し、土砂崩れも起きた。ニュースでしか見たことがないような光景が目の前に広がっていて、夢か現実かわからなくなった。橋は壊れ、車は流され、木の葉や枝が流され、目の前にはいつもの見慣れた地元の姿はなかった。不安だった。

そんな中、僕の家の中はどうだったか。いつもは明るい家族の表情は暗い。家の中も停電で暗い。父はその日から消防の人たちと復旧作業を手伝っていた。僕にもできることはないかと、近くの商店の中に入った。水を抜く作業を手伝った。手伝う中で、近所の方々と話したり、協力したりすることで、不安は少しずつなくなっていった。人と関わる大切さを改めて感じた。

この災害を通して、「水」についても深く考えさせられた。濁流の影響で、いつダムが決壊するかわからない。自分の家まで水浸しになるのではないかと、気になって夜も眠れなかった。恐怖を感じた。さらに、普段飲んでいる、生活に使っている水がどれだけありがたいかもわかった。災害の時には、洗濯やトイレは川の湧き水を使い、なんとか暮らすことはできたが、どれだけ当たり前に使っていたかを実感することができたし、水のありがたみを感じた。

また、命の大切さを改めて感じることができた。ものすごい勢いの水の影響で、海にある公園にいつもいる生き物たちも流されてしまった。しかし、家の近くで一匹のカニを見つけた。石の壁を懸命に登り、生きようとしている姿が心を温かくした。もちろん、災害によって僕たちの命も奪われるのではないかという恐怖ともとなり合わせだった。ただ、この災害でけが人が一人も出なかったことに一番安心した。

この体験を通して、普段の生活がどれだけ豊かなのかを知ることができた。元の地元の姿に戻りつつあるが、一年近くたった今でも、災害の爪痕は残っている。海にある公園には草がない。生き物もいない。道路も直っていないところがたくさんある。それらを見るたびに、「あの恐怖ととなり合わせだった夏休みを忘れてはいけない」と言われているような気がする。水一滴、電気のスイッチ、生き物、一つ一つがとても大切だと感じさせられる。

この経験は、これからの僕の人生に確実に影響することと思う。様々なことを感じさせたこの体験を、僕は絶対に忘れない。

ふるさとの自然、生き物、景色、そして町の人の笑顔、団結力は、僕にとっての宝物だ。

【講　評】

青少年育成青森県民会議
青少年専門指導員　　坂本　　徹

８人とも堂々とした素晴らしい発表でした。それぞれが取り上げた題材やテーマが大変重要なもので、それに対する真摯に向き合う姿勢が感じられました。

横岡さん。特別支援学校のことを調べるところからスタートして、様々な偏見があることから色々なことに気がつきました。人は皆それぞれできることとできないことの違う凸凹した存在、だからこそ他人を認め、目標にして頑張ったり、尊敬したりできる。本当にその通りだと思いました。
佐藤さん。現代らしい題材を取り上げてくれました。ＡＩも含めて、科学技術の進歩は私たちの生活を便利にしてくれますが、それと引き換えにとても大切なものを失ってしまうこともあります。そんな中で心の大切さに気づいてくれたこと、大変うれしく思っております。ＡＩを認めながらも、人間的な心を持った素敵な理学療法士になってくれるものと期待します。
髙村さん。モンゴルの大統領から招待されたというのは、とてもすごい体験だと思います。色々な貴重な経験があったと思いますけれども、あなたの一番の宝は、素晴らしいおじいさんの存在、一番の体験は、再会のときにみんなが涙を流している様子を見たということではないでしょうか。おじいさんの心が、28 年という時間さえも超えた感動に繋がったのだと思います。それをしっかり感じ取って、思い出だけで終わらせないという決意が伝わってきました。
小野さん。お兄さんの存在から､とても大切なことに気がつきました。人それぞれ「普通」が異なる。相手の「普通」を知って、自分の「普通」を押し付けない。できないことではなくてできること、得意なことに目を向けてという主張は、本当にその通りです。発達障害を持っている人たちは過去にもいっぱいいました。素晴らしい才能を持っている人たちがたくさんいるので、そういうところに目を向けていきたいものです。
工藤さん。コロナの影響で練習がきつくなっただけではなく、ルールの変更に翻弄されて大変だったと思います。そんな中で、本当によく頑張ったと思います。新しいルールを受け入れたうえで、さらに前へ進もうというたくましさと強い意志が感じられました。コロナという厄介なものとつきあっていかざるを得ない日常を、自分が打ち込んでいる剣道を通して語り、これからの意気込みを話してくれました。あなたと同様に、つらいながらも立ち向かっている多くの人に勇気を与えてくれる素晴らしい発表でした。
長根さん。選挙権が 18 歳に引き下げられ、中学生の皆さんにとっても身近なものとなりました。それを自分のものとして、しっかりと向き合っている人はまだ多くありません。長根さんは、ひいおばあさんや弟さんという具体的な例を挙げて解りやすく話してくれました。選挙制度の様々な問題点を、中学生らしい視点で捉えて訴えてくれました。私たち大人も考えなければいけないことです。
久保さん。中学生の多くが抱えているという起立性調節障害を、自らの経験から語ってくれました。それだけに説得力のある発表でした。同じ障害を持っている人たちに向けた「誰かを頼る勇気を」との呼びかけは、本当に大切なことです。障害者の自立とは、自分でできることを広げるということと、援助依頼ができるようになることです。あなたのような存在が、理解を少しずつ広げることになると信じています。
最後に工藤君。昨年８月の下北で発生した大雨と土砂災害。本当に大変だったと思います。不安でつらくて大変な出来事だっただろうと思いますが、その中で水のありがたさや、命の大切さを感じることができたこと、人々が団結し協力して乗り越えることを経験したことは、間違いなくあなたの宝物になると思います。

今日のこの大会は本当に素晴らしい大会だったと思います。発表してくれた８人のみなさんだけではなく､聴いていた五戸中学校の皆さんの態度も素晴らしかったです。「新聞」の「聞」ではなくて「傾聴」の「聴」。心から聴いていることが、後ろの審査員席でも感じることができました。他人事ではなくて、自分の経験や考えたことと照らし合わせながら、自分のこととして真剣に聴いているということがよく分かりました。この態度が、今後の五戸中学校の活躍の原動力になったらいいなと改めて感じました。
今日発表してくれた８人のみなさんに共通することは、考えているだけではなくて、実践する、あるいはこれからの実践に向けた決意があることだと思います。人は経験によって育ち、実践によって成熟していきます。発表者のみなさん、そして五戸中学校のみなさんが、今日をスタートラインとして、着実な第一歩を踏み出すことを期待します。
今日は本当に、ありがとうございました。

第44回「青森県少年の主張大会」実施概要

1　趣　　旨

少子高齢化、国際化、情報化が急速に進み、環境が目まぐるしく変化する現代社会において、次代を担う子どもたちには、心身ともに健康で他者を思いやる心を持ち、社会的に自立していける、健やかな成長が求められている。そのためには、広い視野と柔軟な発想や創造性などと共に、物事を論理的に考える力や、自らの主張を正しく伝え、理解してもらう力などを身に付けることが求められている。

未来に向けての夢や希望、社会との関わりで感じていること、心に響いた出来事から生じた思いなどを中学生が発表することにより、自分の生き方や社会との関係を考えるとともに、同世代や大人が、青少年に対する理解と関心を深めることを願い、実施する。

2　審 査 日

令和４年９月27日（火）　13時30分から15時30分まで

3　主　　催

青少年育成青森県民会議、独立行政法人国立青少年教育振興機構

4　後　　援

青森県、青森県教育委員会、青森県中学校長会、青森県私立中学高等学校長協会、青森県ＰＴＡ連合会、五戸町教育委員会

5　審査会場

五戸町立五戸中学校　体育館
（五戸町豊間内地蔵平１－276　電話0178－62－2228）

6　実施方法

所定の内容で県内中学生から募集し、原稿審査で選考された８名による主張発表を行う。

7　次　　第

（１）開会
（２）主張発表
（３）審査
（４）結果発表及び表彰
（５）閉会

8　表　　彰

主張発表を行った８名の中から最優秀賞１名、優秀賞２名、優良賞５名を選考し、賞状と記念品を贈る。

9　その他

最優秀賞を受賞した者は「少年の主張全国大会」（以下「全国大会」という。）出場候補者として推薦され、ブロック代表を選考する審査委員会による審査の結果、北海道・東北ブロック代表（２名）として選考された場合は、全国大会に出場する。

【講　演】

「ラビアンローズ～バラ色の人生を～」

十和田バラ焼きゼミナール　舌校長　畑中　宏之　氏

ボンジュール！皆さんに会えて、本当に嬉しいです。

先ほどご紹介いただきました「十和田バラ焼きゼミナール」。ご当地グルメで街おこしをしているボランティア団体の舌校長（ぜっこうちょう）。ゼミナールという学校形式の運営をしているもので、舌の校長と書いて「舌校長」です。今日は限られた時間の中で、我々の考え方やスタンスを紹介するので、もし「いいな」と感じてもらえたら、それを真似すればいいと思います。そんな形で、これから色々と話を進めていきたいと思います。

「プリンシプル」という言葉、皆さん聞き覚えがないと思いますが、僕らがとても大事にしている考え方です。何を大事にして自分の行動をとっていくか。ひとに嫌われたくない、好かれたい気持ちが先行してしまうと、本当に良いことはできません。嫌われてもいいから自分が正しいと思ったことをやり遂げよう、やり続けようという考え方です。ぜひ、このプリンシプルという考え方を持って、これからの人生を歩んでもらえればいいなと思いますが、最初から僕もこの考え方を持って生きてきたわけではありません。今日は、「ラビアンローズ～バラ色の人生を～」という演題を掲げさせていただきましたが、「バラ色の人生」とは。ご当地グルメで街を活性化させようという意気込みで色々と活動していますが、その根底であるプリンシプルとは、よりよく生きるためにどうするか、その地域に暮らすひとたちが豊かに暮らすためにはどうしたらよいか。そのことを僕らは追究して活動の根底にしています。

よりよく生きるため、皆さんは学校で勉強をしていると思います。その勉強も我々人間に与えられた特権のひとつですが、学問を習得していくのにあたって、覚えておいてほしいことがひとつあります。このベースになるのは哲学であるということです。自分の考え方やスタンスはひとによって違いますが、その人間哲学の根底にあるものは人間の存在形態、人間は孤独だということです。孤独の集合体が社会をつくり上げています。人間は一人一人違うので、相手が考えていることは絶対にわかりません。だからこそ、人間同士分かり合うことが大事です。分かり合おうとするときに媒体になるものは愛です。この世の中に愛というものがなくなれば何も成立しません。では、愛とは何でしょう。

今から７年くらい前に「B－１グランプリ十和田大会」が開催されました。ご当地グルメの街おこしの祭典です。テーマは「とわだに愛にいこう　想いをつなぐ地域愛　地域をつなぐ人間愛」。愛とは相手の立場に立った考え方ができるかどうかの配慮。尊敬、相手に対して敬意を払えるかどうか。責任、相手に対する自分の行為に責任を持てるかどうか。そして、相手のことを知ること。学校生活でも、このすべてを網羅しているのは愛しかありません。これが、僕らが言う「人間愛」と「地域愛」。

Boys, be ambitious.　少年よ大志を抱け。この考え方を十和田バラ焼きゼミナールは行動指針にしていますが、実はこれは、ひととしてどうあるべきかということを培ったうえで大志を抱けという意味です。個人の利益を最優先せず、まずは公的な部分を一番に、自分の利益は二番目にしようという考え方です。社会的価値や道徳的価値を優先し、役割や使命を理解しながら全うすること。自分が良くなりたいと思うなら、自分が所属している社会を良くし、その次に自分が良くなっていこうとする考え方。こ

れが我々のベースにあります。その人間愛、地域愛を実践する場としてのB- 1グランプリ。ご当地グルメの味を競う大会と思われがちですが、実は展示会としての位置づけをしています。ご当地グルメを介して、そのまちを知ってもらおう、足を運んでもらおうという壮大な仕掛けなのです。確かに、目の前にいる何万人という人にご当地グルメを食べてもらうのもいいですが、要はそういった展示会を開催して、メディアを介してここにいない何百万人のひとたちに知らしめようとするものです。「五戸中学校っていいよね」と思うなら、それをきちんと伝えていくような魅力の発信のしかたが必要です。

なぜそういうやり方をするのかというと、街おこしをするためには、街の認知度を上げなければなりません。そのためには人に知ってもらうことが必要です。そのひとつの基準としての、ご当地グルメを活用した展示会です。皆さんも受験のためではなく、よりよく生きるために勉強すればいいのです。ナンバーワンにならなくてもオンリーワンになればいい。すべてのひとたちの得意不得意をもって、社会は構成されています。自分が得意としていることを一生懸命頑張って、よりよく生きていけばいいのです。まずは公的な部分を優先して、自分をそれに合わせること。だから町おこしでは、経済効果を生むことと人づくりを同時にやらないと、本当のまちおこしにはなりません。

さて、我々バラ焼きゼミナールがしたいことは何でしょう。全部、舌校長の反省からきています。誇りを持てるものがあるかないか。若い頃、十和田には誇れるものがないと思っていました。でも、そんなことでは絶対にその地域は活性化しません。本当は色々あるということを、次の世代にわかってもらう役目を担うのは今の私たちです。だからこそ、十和田バラ焼きを介してみんなに知らしめたい。目的は自信と誇りを持った子どもを増やすこと。「いいね」と思ってもらえるために、自分が誇れる材料を確立したい。たまたまバラ焼きに着目して地域おこしをやっているけれど、他にも誇れるものはたくさんある。そういう見方ができる皆さんになってもらいたいなと思っています。つまり、自己肯定感を持つことです。皆さんはこれから大人になっていくわけですが、そのベースとなる自分のスタンスや自信は、全員が持っているものなのになかなか気づけない。だから、まずは自分の良さに気づけるようにしていきましょう。そして、五戸の良さを堂々と世の中に伝えていきましょう。そうすることによって、町が活性化していきます。行動に移さないと何も始まりません。失敗しても全然恥ずかしいことではありません。やり続けること。やめれば失敗です。バラ焼きで街おこしをすると言ったときに、どれだけのひとに止められたか。違うんです。バラ焼きという食べ物、そのオンリーワンに着目しているだけなのです。自分たちに何ができるかを考えて行動に繋げることを、ぜひ実践してもらいたい。そして自分たちで、五戸中学校、五戸町をつくり上げてもらいたい。

今年、日中国交正常化50周年の年です。今から6年前、外務省の外交官から「食で街おこしができるという理念を、中国で教えてほしい」と言われ、遼寧省の瀋陽に行きました。はじめに総領事館や遼寧大学でお話をさせていただきました。そしてその翌年、瀋陽でB-1グランプリを開催しました。ここで僕が何を言いたいか。たかだか500円、600円で食べられるご当地グルメというものが、世界の注目を浴びることになっているということ。地球規模で色々なものを見ること。要は、魅力を発信できるかどうか。僕がお伝えしたことで「いいね」と思うことがあったら、真似してやってみてください。もっと知りたいことがあったら、いつでも教えます。外交官の方が言いました。「隣の国とはどんなことがあっても争いはできない。仲良くしていくには、民間交流の機運を高めるしかない」。同じ土地の同じ人間として、仲良くしながら、五戸町を、そして青森県をよりよくしていきましょう。

第44回 少年の主張全国大会～わたしの主張2022～

内閣総理大臣賞

あなたの声、心に届け

山梨県　北杜市立甲陵中学校　３年　前橋　真子

「真子ちゃん、きょうだいいるの？」「妹と弟がいるよ。」「妹かぁ。羨ましい。」羨ましいなんて……。私は妹の存在を口に出すのをためらうことがあった。

私の妹は生まれつき音が聞こえない重度難聴だ。左耳に音を増幅させる補聴器、右耳に脳に音の信号を送る人工内耳を付けている。発音も上手ではない。私が小学生のとき「妹、障がい者なのに元気だね。」と友達に言われた。なんとも言い表せないモヤモヤが私の心に渦巻いた。障がいのある妹が明るく元気なのは普通のことではないと思い、恥ずかしさを覚えた。そしていつの間にか妹のことを口にするのも、一緒に出掛けるのも辛くなった。

この春中学校入学を控えた妹は、補聴器を新調した。私も一緒に店に行った。そこには色とりどりの補聴器が並んでいた。お店の方は、好きな色を選ぶよう言った。私は「真紀ちゃん、黒か茶色を選んだら？」と勧めた。強く勧めた。黒か茶色なら髪の毛と同調して、あまり目立たない。みんなと変わらない見た目でいられる。恥ずかしい思いをしなくてすむように、何度も言った。しかしそんな私を見て妹は言ったのだ。「誰になんと思われても、これは私の耳なの。私は黄色い補聴器の私を見てもらいたいの。」妹に言われてハッとした。障がいにこだわっていたのは私自身だったのだ。

聴覚障がいのある妹が、明るく元気なのはおかしいのか。いや、妹は妹だ。妹が笑顔を絶やさないのは、今まで本当に沢山の努力をしてきたからだ。私と同じ小学校に行くために、人工内耳の手術を受け、手話が無くても友達と話せるように病院やろう学校に通って、発音練習を頑張っていた。誰にでも優しいのは、自分がされて嫌だったことや辛かったことを痛いほどに知っているからだ。私は、今まで辛くて、悔しくて泣く妹を何度も見た。でもその度に努力してハンディキャップを乗り越えていた。そんな妹の努力を一番近くで見て知っているのは私だ。障がい者というフィルタを通さず、ありのままの妹を見て欲しい。手話や口話、筆談、テレビの字幕も全部、社会と繋がるコミュニケーションツールの一部だ。それが妹の全てではない。

聴覚障がい者は、一度見ただけでは耳が不自由かわからず、接し方に戸惑うことがある。でも耳の不自由な人がみんな、相手に手話を望んでいるわけではない。聴覚障がい者が困っているときは、その人の正面から「何か手伝えることはありますか。」と口を大きく開け、ゆっくり話しかけてほしい。

「思いやりのある言葉は、たとえ簡単な言葉でも、ずっとずっとこだまする。」これは貧困や病に苦しむ人の救済に生涯を捧げた、マザーテレサの言葉だ。心のバリアフリーの精神を表している。まずは聞こえないことについて知ろうとしてほしい。その思いやりでどれだけ救われる人がいることだろう。

妹は毎日黄色い補聴器をつけ、お気にいりのテニスラケットを持ち元気に登校している。先日友達に「妹さん明るくて、部活のムードメーカーで、頑張っているよ。」と言われた。ありのままの妹を見てくれていると分かり心が温かくなった。そんな妹は私の誇りだ。

私たちにできることには限りがあるかもしれない。それでもあなたの身近にハンディキャップを持つ人がいたなら、そのハンディというフィルタ越しではなく、その人自身や心に寄り添ってほしい。障がいのある人への理解が進むことで、一人またひとりと笑顔が増えていくと確信している。

妹の耳に、あなたの声は聞こえないかもしれない。でも、あなたの気持ちは妹の心に確実に、届いている。

文部科学大臣賞

日本を耕す

長崎県　大村市立玖島中学校　３年　赤川　明信

僕の夢は「日本の未来を明るくすること」です。僕は幼稚園の頃から日本地図や歴史のマンガを読むのが好きでした。二〇〇〇年以上続く歴史、多様な風土と文化、美味しい和食、大好きな長崎くんちなどなど日本の素晴らしさを知って「日本ってすごいなぁ」と思うようになりました。小学校高学年になるとニュースにも関心を持ち始め、少子高齢化、過疎化といった大きな問題に日本が直面していることも知りました。僕はそんな日本の持つ大きな課題をどうにか解決したい、僕にはなにができるだろうと考えるようになりました。その答えは僕の家の中にあったのです。

僕の父は消防署で働きながら、家業である農業にもはげんでいます。いわゆる兼業農家です。お米、はっさく、夏はなすびやきゅうり、冬は大根やはくさい、神棚に飾る榊までたくさんの種類の作物を作っています。そんな家に生まれた僕は、田畑の野焼きや農薬の散布、田植えなど休みの日はよく駆り出されます。手伝っていて感じるのは多くの作業に「キツイ」、「汚い」、「危険」の農業の３Ｋがあてはまることです。束になった藁や三十キロある米袋を担いで数十メートル先まで運んだり、田植えの時は足は焦げ茶色に染まり、時には顔まで泥まみれです。また、チェーンソーや草刈り機。油断して使ってしまうと命に関わる事故にもつながります。

これを考えれば、農業をしたいという若者が減っているのも納得してしまいます。僕は忙しい父からの「苗ば植えんばけんが、外に来い」といった言葉に聞こえないふりをすることもよくありました。僕はそれほど農業の手伝いをするのが嫌でした。

ところがある日、野菜の種を植えた数日後畑に水をやりにいくと「すげぇ」一つだけかわいい小さな芽が出ていました。これが、たったの二ヶ月で自分のふくらはぎよりも太くて、食べるとほんのり甘い立派な大根になるのです。植物の生命力は本当にすごいものです。そして、作物はその種や苗を植えて、手入れをする人がいなければ、成長することはできません。農業では作物を数ヶ月で「立派な大人」に育て上げ、いわば植物の「親」になることができるのです。

それ以来僕はよく植えた野菜をじっと見つめるようになりました。

「この前、植えた大豆がこんなに大きくなっている。」

見ていると本当に心が落ち着き、勉強の気分転換にもなります。僕はペットを飼ってないし、アニメやアイドルの「推し」もいません。そんな僕にとっては作物こそが自分を癒してくれるペットや推しに代わるような存在であり息子であり、一つの大切な命なのです。

また、僕はもう一つ気付いたことがあります。世間では３Ｋと思われているような仕事でも、農家のように感動や喜びを得たり、多くの人から感謝を受けて誇れる仕事なのではないかということです。だから父もツラくても、忙しくても仕事を続けられるのでしょう。

この二つのことに気付いてから僕の農業に対する考え方は大きく変わりました。そして、「日本の未来を明るくする」ということについて改めて考えました。

今、コロナ禍によってリモートワークが増えたり、副業が解禁されたり、多様な働き方が増えてきています。また、日本の食料自給率は二〇二〇年度カロリーベースで三七％です。これは外国と比べても、低い水準で農家の高齢化や若者離れで更に下がるかもしれません。耕作放棄地も増えています。我が家でも祖父がなくなってからは広い土地を父一人で管理しています。雑草は三ヶ月で伸び、落ち葉や枯れ木が落ちるので手入れは本当に大変で、限界だと思います。このような現状を踏まえ、僕は農業の新たな形への改革が必要だと考えます。ＩＣＴやＡＩ、自動運転といった日本の誇る科学技術を用いて、農家の負担を減らして、他のことにもチャレンジができる「新しい農家の働き方」です。

僕はこれまで「絶対に将来農業には関わらない」「この田舎から解放されるまであと五年もあるのか」と思っていました。でも、農業の素晴らしさを知った今では、農業に関わり続けたいという思いが強くなっています。農業の感動、おもしろさを伝えていくことで、若者がワクワクしながら畑も日本の未来も耕していくそんな「未来」になるのではないでしょうか。「新しい農家の働き方」それこそが「日本の未来を明るくすること」の第一歩だと信じて。

国立青少年教育振興機構理事長賞

私が育てる「結（ゆい）」

栃木県　大田原市立親園中学校　３年　阿久津　結花

お米は、私をたくさんの人と結んでくれます。私の父と祖父は、お米の食味を競う国際大会で最高賞にあたる金賞を受賞しています。ギネス世界記録に認定された「世界最高米」の原料にも選ばれ、日本中からお米の注文が殺到しています。気がつけば、私の夢は世界で一番美味しいお米を栽培することになっていました。

米作りの知識や技術は、もちろん父と祖父から教わりました。苗を強くするための苗踏みや、田植え機やコンバインの運転の仕方。見ていると簡単そうに見えても、自分でやってみるととても難しいのです。背丈が低く根は白く長い稲の方が台風や病気に強いなど、知れば知るほど面白くなっていきました。

小学六年生のとき、小さい田んぼを父から貰いました。お米は原種に近いほうが美味しいと知り、ササニシキの親にあたり、原種に近い「ササシグレ」をそこで作りたいと思いました。父の知り合いで会津でササシグレを栽培している人から種を分けてもらえることになり、私の「ササシグレ」作りはスタートしました。苗作りからこだわり、無農薬、無肥料、自然栽培で育てています。毎朝学校へ行く前に除草をしています。作り始めたあとで、「ササシグレ」は血糖値の上昇が穏やかで、米アレルギーの人も症状が発症しにくい、体に優しいお米であるということも知り、一層思い入れが強くなりました。私の「ササシグレ」は年々食味値が上がり、美味しくなっていると感じています。

みなさんは、農業に「つらい」「汚い」というイメージをもっていませんか。実際に農業に触れてみたら、農業の楽しさがわかるはずです。私の田んぼは手植えなので、人数が必要です。去年は私と父と友達一人の三人でしたが、今年はさらに増え、三人の友達が田植えを手伝ってくれました。素足で田んぼに入ることを躊躇していた友達も、終わった頃には「楽しかった」「来年も手伝うよ」と言ってくれました。

こんな風に心を込めて育てた私の「ササシグレ」は、今、自然食品を扱うお店で販売しています。販売することが決まったとき、私はパッケージをデザインしました。無農薬、無肥料、自然栽培のイメージをシンプルなデザインで表現しました。このお米が人と人を結ぶことを想像し、稲が輪を描くようにイラストを書きました。そして、「結」と名付けました。

「新米のように美味しい」「また買います」店頭に並んだ私のお米を買ってくださった方からのメールが届きます。会ったこともない人が私のお米を食べて、「美味しい」と言ってくれる。こんなにも嬉しいなんて。本当にお米が人と人とを結んでくれました。生産者が販売者を通して消費者と繋がれるとき、たくさんの人が幸せになれると知りました。もっともっとこの喜びや幸せを広げたい、そう思いました。

私のお米は、地域の食材を使った料理をキッチンカーで提供している方とも結んでくれました。前回のイベントで好評だったので、次も声をかけてくれそうです。

今、私にはやりたいことがたくさんあります。自分のお米を使った料理を提供するキッチンカーやレストラン。米粉のお菓子の販売もしたい。農作業の体験を通して子どもたちに農業の楽しさを広めたい。いろいろな企画はＳＮＳで発信して、たくさんの人と繋がり、人と人を結びたい。

私を取り巻くこれらの繋がりを作ってくれた父に、繋がりを広げるコツを聞いてみました。「何かを決めると、物事とは動き出すんだよ。小さな一歩を踏み出すことで世界は広がっていく。」と話してくれました。

私も一歩を踏み出します。これからは、自分の考えていること、取り組んでいることを、自分でどんどん発信します。私は、田んぼを照らす太陽のような笑顔と、相手にエネルギーをもたらす魅力的な人になって、人と人を結んでいきます。そこで出会えた人との「結」を大切にし、笑顔になる人を増やすために。

審査委員会委員長賞

私のスタートライン

宮城県　塩竈市立玉川中学校　３年　浅野　友希

「あ、地震。」
就寝して間もなく、突然の揺れ、枕元に置いたスマートフォンから流れる耳ざわりな音に、私は飛び起きました。
東日本大震災から十一年が経過した今年三月十六日。福島県を震源とする、マグニチュード七・四の地震が、私の住む宮城県を襲いました。すぐに家族と声を掛けあうと心が落ちつきました。
「緊急地震速報の音、本当すごい。」
「超うるさい音だよね。熟睡していても絶対気付く。」
家族と交わした何げない会話が、ふと、私の心にひっかかりました。
「この音を聞くことができない人は、地震の時どうしてるんだろう。」そんな疑問が頭から離れず、気になった私は調べてみることにしたのです。
日本には、いったいどれ位の聴覚障害者の方々がいるのでしょうか。その数は約二十九万人と言われています。この数を聞いて、多い・少ない、どう感じたのでしょうか。
私は、人数の多さに驚きました。というのも、私は今まで、聴覚障害者と呼ばれる人達と接することが無かったからです。
このことを父に話すと、父は、
・東日本大震災の時にも、様々な障害を持つ人達の避難や対応が問題になったこと。
・聴覚が不自由な人は、自治体等の防災無線や避難警報の音を聞けず、災害の時に、正しい情報を入手できないまま、逃げ遅れてしまう可能性があること。
・父自身、仕事で知り合った聴覚障害者の方と筆談や身ぶり手ぶりを交じえながらコミュニケーションした経験があり、手話の必要性を実感したこと。
そして、社会の中で、ハード・ソフト両面で、バリアフリーの必要性があることを教えてくれたのです。
さらに、父は、私を外へと連れ出しました。
父と一緒に目にしたのは、歩道上の点字ブロック、車椅子や高齢者の為のスロープ付きの通路。エレベーターや案内板の点字表示、そして、視覚障害者用の音響式信号機。
日常生活の中にあふれる、様々なバリアフリーを目のあたりにして、私は、日本に既にある優しい社会環境に気付かされたのです。
私には、多様な人々が暮らす社会への理解がまだまだ足りない。
そんな私の思いに気付いたのでしょうか。
父は、
「互いを思いやり、わかり合おうとしようとすることが大事だよ。気付いた時に、どうするかを考えて、行動に移せばいい。」
と言ってくれたのです。
地震のあの日、聞いた、緊急地震速報。
私は、その音を聞いた事をきっかけに芽生えた疑問から、自ら調べ、父と学び、様々な障害をとりまく社会の一部分を知りました。
そして、今の私にできることは何かと考えた時、一人一人が誰かを支えあえる社会を担う人間になりたいと思ったのです。
まだ知らない誰かを思いやり、行動する。
きっと、ここが私のスタートライン。
私は、手話を学び始めました。
テレビや本など、学び場を探しながら、独学で勉強中です。
私達の暮らす、これからの社会が、より良い未来になるように、今、自分にできること。
少しずつでも一歩ずつ、前に進めるように。
私は、これからも、自ら考え、学び、行動していきます。
みなさんも、何かを始めてみませんか。
そこが、あなたのスタートラインです。

審査委員会委員長賞

水餃子

滋賀県　米原市立米原中学校　３年　田島　桂

我が家では、水餃子を作る時、大抵皮作りから始めます。小麦粉に水を入れ、力いっぱい捏ねて、麺棒で一枚一枚皮を作ります。ムチムチで食べ応え抜群なのにサッパリとしていて、いつの間にかお腹がはち切れそうになる程美味しい我が家の味です。この餃子、作るのはいつも父で、私は毎回手伝いに呼ばれます。

先日、いつものように一緒に作っていると、父がポツリと言いました。

「最期に食べる物はこの水餃子がいいな。」

はて？と思いました。確かにこの水餃子は美味しいけれど、他にももっと美味しい物はあるのに…。すると、父が続けて言いました。

「去年、お父さん、心臓悪くして入院しただろ。その時ちょっと気が弱くなって、死ぬ前にしたい事とかいきたい所とか考えていて、思ったのがこの餃子。」

「でも、病気のときは自分で作れなくない？」

「いや、最期に食べたいのは、桂ちゃんが作ってくれる予定の水餃子。そこが重要。」

なんで私の？と聞いていくと、我が家と餃子をめぐるちょっと長い話が始まりました。

父の餃子は、父の母、つまり私の祖母から習ったそうです。そして、祖母はその父である、私の曾祖父から習ったのだそうです。明治四十二年生まれの曾祖父は、戦前満州で菓子屋を営んでいました。手先が器用で、美味しい物が好きだった彼は、その地の中国人からとある水餃子のレシピを教えてもらったそうで、今私が食べているのも、その時のレシピ通りのものだそうです。中国の伝統の餃子が、百年近い時を経て、自分達家族の食卓に上っていたなんて、思いもしませんでした。

父はこのような由来を語った後、「最期にこの水餃子を食べたい理由」を、「歴史が繋がる感じがするから。」と言いました。満州の中国人から曾祖父へ、そして、その曾祖父は戦後命からがら満州から引き揚げて、日本で何とか生き延び、祖母にこの味を伝えました。父は、両親が共働きだったので、早くから料理を覚えたそうです。そのレパートリーの中に、祖母が教えた水餃子のレシピがあったのです。だから、父にとって、それを受け継いで自分の娘が作った水餃子こそ、最期の食事にふさわしいのだと、話してくれました。

時々、私は、「私が死んだ時、何が残るのだろう。」と考えます。もし何も残らなかったら…、誰からも忘れられてしまったら…と思うと、とても怖くなります。例えば、美術や文学の美しい作品を創ることができれば、それはたくさんの人の心に残り続けることでしょう。あるいは、歴史に残るような発見をすれば、生きた証が残せたと満足できるでしょう。けれども、そんな人はほんの一握りです。自分とは関係のない話のように思えてなりませんでした。

けれども、この水餃子の話を聞いて、少し考えが変わりました。この水餃子のレシピを伝えた中国人も、海を渡って百年後の日本で作り続けられるとは思っていなかったでしょう。それがいろいろな偶然が重なって、今こうして我が家に伝わっているのです。

「なんでもない」人の「平凡な」営みが積み重なり、私たちに伝わり、今度は私たちが次の世代に伝える…。それはほんのささやかなことかもしれません。自分の名も残らないかもしれません。けれども、私たち一人ひとりの生きた証は、必ず残り、未来へと繋がっていくのです。水餃子一つで何だか大げさなようですが、改めて身の回りのものに目を向けてみると、そこには幾つもの、「なんでもない人」の生きた証が刻まれているのだと気づくことができました。私たちの将来は「特別な人」か「無価値な人」の二択では決してないのです。

第４４回少年の主張全国大会～わたしの主張 2022～
開催要綱（WEB 開催）

１．趣　　旨　少子高齢化、国際化、情報化が急速に進み、環境が目まぐるしく変化する現代社会において、次代を担う子どもたちには、心身ともに健康で他者を思いやる心を持ち、社会的に自立していける、健やかな成長が求められています。
　そのためには、広い視野と柔軟な発想や創造性などと共に、物事を論理的に考える力や、自らの主張を正しく伝え、理解してもらう力などを身に付けることが大切です。
　少年の主張全国大会は、子どもたちにとってこれらの契機となることを願い実施するものです。

２．開催期間　令和４年１１月１日（火）～１１月３０日（水）
※審査結果は１１月１３日（日）に掲載します。

３．開催方法　上記の期間、少年の主張全国大会 WEB ページに全国大会出場者（１２名）の主張発表動画を掲載し、１１月１３日（日）に審査委員会で審査した結果を掲載します。
　なお、全国大会に選出されなかった作品については作文を掲載します。

４．対　　象　日本在住の中学生及びそれに相応する学籍又は年齢にあるもの
※国籍は問わないが、日本語で発表できること。なお、作品は未発表、自作のものに限ります。

５．主　　催　国立青少年教育振興機構

６．協　　力　都道府県、青少年育成都道府県民会議、全日本中学校長会、日本私立中学高等学校連合会、公益法人日本ＰＴＡ全国協議会

７．後　　援　内閣府、文部科学省、東京都教育委員会、日本放送協会、一般社団法人日本民間放送連盟、一般社団法人日本新聞協会、社会福祉法人全国社会福祉協議会

８．主張発表者（出場者）・発表内容

（１）主張発表者　各都道府県より推薦された地方大会（都道府県大会）優秀者１名、計 47 名の中からブロック代表として選ばれた 12 名が主張発表を行います。

（２）ブロック代表定数　全国を５ブロックに分け、ブロック毎の定められた出場者数のブロック代表を選出します。
○北海道・東北ブロック：２名　○関東・甲信越静ブロック：３名
○中部・近畿ブロック　：３名　○中国・四国ブロック　　：２名
○九州ブロック　　：２名

（３）発表内容　ア．社会や世界に向けての意見、未来への希望や提案など。
イ．家庭、学校生活、社会（地域活動）及び身の回りや友達との関わりなど。
ウ．テレビや新聞などで報道されている少年の問題行動、大人や社会の様々な出来事に対する意見や感想、提言など。

（４）発表時間　５分程度（400 字詰原稿用紙 4 枚程度）

９．表　　彰

（１）全国大会出場者全員（12 名）に国立青少年教育振興機構理事長より奨励賞、全国大会出場者に選考されなかった都道府県代表者全員（35 名）に同理事長より努力賞を贈ります。

（２）全国大会の審査委員会で審査の上、内閣総理大臣賞・文部科学大臣賞・国立青少年教育振興機構理事長賞を選考し、賞状を授与します。また、審査委員会の審査過程によっては、審査委員会委員長賞が選考される場合があります。

（３）全国大会出場者全員（12 名）に、記念品が贈呈されます。また、内閣総理大臣賞・文部科学大臣賞・国立青少年教育振興機構理事長賞・審査委員会委員長賞を受賞された方には、副賞が贈呈されます。

～育てよう　未来を見つめる　かがやく瞳～

青少年育成青森県民会議

〒030-8570

青森市長島1-1-1　青森県青少年・男女共同参画課内

TEL：017-734-9224

FAX：017-734-8050

E-mail：seishonen@pref.aomori.lg.jp